

豊年祭にみる伝統と変容

— 鹿児島県大島郡（奄美大島）宇検村の事例を中心に —

玉川学園女子短期大学 八木橋伸浩

E-mail:yagihasi@jcw.tamagawa.ac.jp

はじめに

いわゆる琉球弧の一部に位置付けられる奄美大島は、過去、琉球王朝（沖縄）支配、薩摩藩支配などで揺れ動いた葛藤の歴史を重ね、さらに戦後は米軍政府下に入り、昭和28年の本土復帰によって鹿児島県に編入されるという受難の歴史を辿ってきた。同島には現在も数多くの伝統文化が継承されているが、本報告で取り上げる豊年祭もその一つである。

豊年祭についての事例報告や分析に関しては過去数多くの成果が公表され、九学会以後の奄美研究をリードし活性化してきたことは周知の事実である。本報告では平成10年に実施された宇検村田検集落の豊年祭の事例を取り上げるが、特に豊年祭のなかで実施される相撲に着目し、豊年祭の目的変化と相撲の形態変化を中心に論じてみたい。

宇検村田検集落の概要

鹿児島県大島郡宇検村は鹿児島県の南方 383kmに位置し、奄美大島南西部にあって名瀬市からの距離は約57kmである。北は大和村、東は住用村、南は瀬戸内町と接し、村の総面積は102.55km²。村内の14集落は西側の東シナ海に向かって入り江を形成する焼内湾沿岸沿いに点在し、田検集落は湾の北側にあり、宇検村の中心集落である湯湾集落とは1km程度の距離に位置する。焼内湾は天然の良港として知られ、深く穏やかな入り江は遠近海漁船の避難港になってきた。村内全域の土地構成は90%以上を山岳地帯が占め、奄美群島最高峰の標高 694mの湯湾岳を中心とする山々が東西に延びる連峰を形成し焼内湾を囲むため、冬季には北からの寒風を遮断して温暖な気候をなす源となっている。また、アマミノクロウサギなど貴重な国指定特別天然記念物の生息地でもあるが、河川は急流をなし、可住地は狭小である。気温は年平均20.3℃、年間を通じて降雨量が多いため高温多雨の環境にあり、温帯植物や熱帯植物が生育している。

『村勢要覧』等によれば、村内の人口・世帯数は大正期に9000人余、約1800戸であったが、以後は漸次減少傾向となり、昭和55年に2595人、1039戸まで落ち込むが、その後減少率は鈍化し昭和60年2473人、1053世帯、平成10年には2405人、1157世帯を数えている。だが田検集落に限定すれば、昭和60年 214人、86世帯、平成10年 167人、86世帯と、近年も過疎化の傾向から免れていない。伝統的な生業である農林業への年間を通じた従事者の割

合は低く、農家戸数は全戸数の2割程度、そのほとんどが第2種兼業農家である。村内に田圃は現存せず、果樹と鶏卵の生産が中心となっている。近年は第3次産業中心の構造へと転換しつつあるが、水産業や建設業への依存度は高く、特に焼内湾に展開する鯛・フグ・真珠等の養殖業が顕著で、漁業生産を支えている。しかし、村で公社を設立し、サトウキビを利用した黒糖焼酎を開発して村内生産し、不振である林業への対応策として合板生産を行うなど、農林業を基盤とした新たな展開が模索されてもいる。

豊年祭と相撲

豊年祭は十五夜祭とも称され、新穀感謝のみならず五穀あるいは新穀の豊饒を願う予祝行事の性格も併せ持つと考えられる年間最大の祭りである。宇検村の各集落で実施される豊年祭では八月踊りと相撲が祭りのメインイベントとなっており、田検集落も同様である。宇検村では稲作が衰退した現在においても、農耕儀礼の代表的な存在として各集落単位で8月から10月にかけて実施されている（※田検集落で平成10年8月16日に実施された豊年祭の概略については、報告時の配布資料を参照されたい）。

相撲は元来、神事と深く関与して成立し、以後、娯楽性や競技性を高めていったとされている。奄美の豊年祭で実施される相撲は、祭りの娯楽性を支える重要な要素として、かつ島の暮らしを守る力強い男性像を具現化する象徴として執り行なわれてきた。と同時に、相撲の節会として宮中で古来より実施された豊凶占いや水神供養の神事としての側面も有していたとみることができるだろう。

奄美の相撲と沖縄の角力

【奄美の相撲】

奄美における相撲の起源は詳らかではないが、一説では、江戸享保期にすでに「十五夜相撲」が行なわれていたといい、また、八月踊りの起源が琉球王朝支配の時代とされることから王朝支配以後の開始とみる説もある。その後の歴史的展開はここでは省略するが、相撲のスタイルが琉球・薩摩の両支配に影響を受けた可能性は否定できない（※歴史的展開等の詳細は「八木橋：1999」を参照されたい）。だが、幕末期に奄美大島に遠島となった名越左源太が記した『南島雑話』の「嶋人相撲」の図には、米俵らしきもので作られた円形の土俵、大和式のマワシを締め相撲を取る力士、軍配らしきものを右手に持った行司の姿が描かれている。いずれにしても、現在豊年祭で実施される相撲のスタイルは地元で江戸相撲（大和相撲）と称される大相撲形式のもので、娯楽性・競技性の高い内容となっている。なお、奄美の相撲の競技性を考えるに際し、大正期以後は横綱などの階級制を採用した全島レベルを単位とする相撲が確認されること、奄美が米軍政府下にあった時代に朝夕が大阪出身として角界入りした事実、本土復帰後も大相撲入りを果たす力士があったこと、昭和40年代に日本相撲協会の助言で奄美全郡に相撲協会を設立する動きがみられ

たことなどは重要であろう。現在も全日本アマチュア相撲、少年相撲全国大会等に優勝者を出すなど、奄美の相撲のレベルの高さはよく知られている。

【沖縄角力との相違】

一方、沖縄では相撲はシマと呼ばれ、「角力」と表記する例が多い。沖縄角力はウチナーシマと称され、大和式とは異なるスタイルで知られている。『沖縄大百科辞典』によれば、戦前までは成文化された競技規定のようなものではなく不文律が厳守された。娯楽的な要素が濃く、反則をすれば観衆から引き出されたという。常設の土俵はなく、平坦地に砂やおが屑を撒くだけで、大きさや形にも規格がなかった。円形の土俵や競技規定が確立したのは戦後のことであった。沖縄角力では大相撲という立合いがなく、裸にもならず、マワシも存在しない。運動着や柔道着を着用した上にマワシの替わりとなる帯を締め、その帯を掴んで右四つに組んだスタイルから勝負が開始される。土俵にあたる砂場から外に出ても、地面に手がついても、倒されても、完全な勝敗は決せず、必ず背中（両肩）が地面につくことが必要で、技有りの判定もある。多くは豪快な投げ技で相手が仰向けに倒されて勝敗が決まるが、制限時間内の何本勝負という形を採用している点も含め、大相撲形式のスタイルとは大きく異なっている。沖縄では、沖縄角力と大相撲形式の相撲は別のものと認識されており、大和式の相撲は大正時代に旧日本海軍によって伝えられたとされる。

沖縄角力のスタイルは、立合いのない韓国相撲（シルム）やモンゴル相撲に共通し、沖縄角力の文化的位置付けに考察の余地があることを示唆している。俗に琉球弧の文化圏とされる奄美大島では同様の相撲スタイルを確認することはできないが、吉満義志信識が明治28年に著した『徳之島事情』に掲載された「角力の図」には、明らかに沖縄スタイルの角力が描かれており、奄美群島のなかでの相撲（角力）の受容と継承のされ方に違いのあることを示唆するものと推察される。だが、年中行事と結び付き、祭礼等に奉納される点は奄美・沖縄共通といえよう。

結びにかえて ― 豊年祭の目的変化と相撲形態の変化

豊年祭は奄美の各集落における年間の最大行事であり、祭りを素材に神觀念の抽出や年齢組織・社会関係・集落間関係等の分析解明など様々なアプローチが計られてきた。また、踊り・唄・相撲等の芸能的側面に着目した研究も少なくない。だが、豊年祭の重要な構成要素である相撲に限定すれば、相撲そのものの形態に着目し、相撲それ自体が持つ意味を問題とする試みは過去なされず、大相撲形式の取組みが自明のこととされてきた。

豊年祭が本来、農耕儀礼であることは既述した通りであるが、農業が衰退した現在の宇検村においては、農耕儀礼としての豊年祭はもはや本質を失い形骸化した行事として現存しているとみることができる。しかし相変わらずシマ最大の行事であることは、そこに別の意味が付与され行事存続の力として作用していることを想像させる。シマへの強固な帰属意識、余興などの娯楽性を高めることでの活性化などがその背景として指摘されてきた。

だが、相撲に着目してみると、また別の側面が垣間見えてくる。豊年祭の相撲が力強さと娯楽性、さらに儀礼性を備えたものであることは既述した通りであり、現在もそれは失われてはいない。しかし、相撲の競技化がより鮮明になってきた事実も無視できない。宇検村湯湾集落に住む40代の男性は、20年ほど前に村がアマチュア相撲協会に入ってから相撲から楽しみが失われ、競技になってしまったという。また、昔は各集落ごとに認められたタテ行司（名行司）がいたが、今はアマチュア相撲の行司資格を持つ人が、ルールに則った審判として行司を務めるケースが多くなった。現在では各集落に常設されている屋根付きの立派な土俵も、以前はみな通常時はただの地面で屋根はなく、相撲を取る際に砂入りの吠を並べたり、綱で円を描いて土俵とし中に砂を撒く程度のものであった。現在の屋根付きの4本柱も、以前は豊年祭に合わせて紅白の布を巻いた柱を立て、その対角線上に注連縄を渡して張り、縄の交差したところに電球を下げた。多少の雨では中止にならなかったという。ところが、近年の村の指導で各集落の土俵は大きく形態を変えた。4本の柱は赤・青・黒・白の4色に塗り分けられているが、こうした配色は以前は皆無であった。この4色は大相撲の土俵上の天涯から垂れ下がるフサの色と同じであり、大和式の大相撲やアマチュア相撲の様式と共通する色彩要素である。形式面からの競技化が進展することで、結果的にルール重視のスポーツとしての相撲として意識されるに至ったと考えられる。

また、田検集落ではこの年、力士の怪我を避けるための精神的支えとなっていたサシガミ（殺生神）をみる道具の使用をやめ、サシガミを意識することさえなかった。祝祭を支える儀礼の場、結束の場としての役割を喪失した豊年祭は、親睦の場、慰労の場へと変質し、もはや神事的意味合いは強調されないのである。しかも、子供たちの娯楽面での多様化は、豊年祭そのものや相撲に対する興味関心の低下や分散化をも招いている。

いずれにしても、近年、全村レベルで行なわれた土俵の常設化と土俵形式の大和相撲（大相撲）化の流れが、相撲の競技性をより一層高めたこと、さらに本土復帰以後、特にスポーツとしての相撲が一般化したことが、祝祭空間での相撲に与えた影響は少なくないと思われる。各種大会での奄美出身力士の活躍がこれをさらに助長したのであった。しかし、競技性の高まりは同時に相撲の特定少数化を進展させ、能力ある実施者の優位性を高める結果となり、旧来の豊年祭で行なわれてきた特定多数による共時的な娯楽性と平等性をはぎ取っていったのである。相撲の新たに分化した姿がここにはある。

《主な参考文献》

- 名越左源太（国分直一・恵良宏校訂），1984『南島雑話』2（東洋文庫432）平凡社
 阿南透，1989「豊年祭における集落間コミュニケーション」『奄美伝統文化の変容過程』国書院会：395-410
 渡邊欣雄，1993『世界のなかの沖縄文化』沖縄タイムス社
 宇検村役場企画課，1997『1997宇検村勢要覧』
 八木橋伸浩・栄和香，1999「豊年祭と相撲」『論叢』（玉川学園女子短期大学紀要）23：25-53